知覚世界と造形的形像

K・フィードラー理論の
展開を目指して

物部晃二

造形的形像（視覚形像）を念頭に置く。造形的形像の活動は表象形像の活動に差し当たる次のように想定する。樫の知覚あるいは表象形像を始まり、その手を介して、造形的形像（作品）へと展開する。そして、この手の眼にも観るかたちで、馬はまた知覚世界に参入する。この差し当たる次に阻むの、誰かの手で形成された作品や形像が、通常の知覚形像とは異った、すなわち造形的と呼び得る形像として、他の誰かの意識にも立ち現われるのには、いかなる事情に拠るのであろうか。こうした事情（根拠）を解明するためには、先に想定したうえで、造形形像をさらに遡って、知覚世界の成立立ちからの呼味し直す必要がある。さもなくば、造形形像と通常の知覚形像とは、同等の知覚世界に並存することになる。一方、視覚に関する限り、それ自体目を見え、つまり感覚質ではなないが、外界からの作用である。それらの作用は、感覚を介して、外界と神経・脳と結ばれるプロセスを経てかたちづくられ、われわれの各人の意識現象は、こうした過程を経てかたちづくられ、われわれの知覚世界はこうした感覚を手がかりとして形成され、その意味で広く表象世界に帰することができる。ハルムホルツのへその理論は、この点での解明において一致する。そのままだは、いつでも各人の私的世界における展開の域を出ない。この表象世界を、手を介して、つまり他の手の眼にも観るかたちで、さらに展開可能となる。と考えた。そして、あらゆる二つの表象形像が展開されてここに存在するかたちで、他者の知覚世界においても表象される場である。この思考法で、といえよう。（口頭発表の質疑応答を経て、ここで次のことを付言しておきたい。現代の認知科学や脳生理学の成果に対して、形像の側から提起する問題は、フィードラーにおいて既に基本的な仕方で提起され、解明の経がつくれている。）